

奉納されたと伝えられる優雅な法要であった。

洲楓会演奏会

五月八日(日)夕五時半東京上野本牧亭、主催洲楓会本部(会長大館美江子女士。千円)...

柴田旭堂女史琵琶で渡米

アジア協会、カナダ政府、日本航空がスポンサーで建国百年祝賀文化使節として神戸生田神社権宮司以下神官六人、巫子二人、弓神楽六人、神戸たいこ六人、剣舞詩舞各一人、琵琶柴田旭堂女史の一行が神事芸能と銘打って五月二十日伊丹空港出発、バンコク首都ピクトリアで三日間公演のあと約半月の旅行を続けて六月初旬帰国される予定。

第六回春の定期演奏会

五月二十二日(日)昼一時〜四時博多駅前大博多ビル十二階ホール、主催博多旭蝶会、後援県、市教育委員会外、司会KBC鶴原太郎氏(五百円)。「一寸法師」等五曲を四才から十三才の男女児十三人が演奏の外琵琶、尺八、琴、十七絃六人の合奏曲「春」や婦人十一名の茶絃録、琵琶賛助演奏は京都琵琶協会代表植村寛水。(次号詳報)

ラヂオ琵琶放送

五月七日(金)三時NHK・FM。村上元三原作鶴田錦史作詞「義経」。義経1友吉鶴心、弁慶1内山鶴崇、静・富樫1石坂鶴朋、紘半

田綾子、田中行雄、三宅弘の諸氏。

水波旭史女史

東京都世田谷区世田谷三丁目一ノ二〇生重定画伯夫人の同女史は四月二十二日急逝、二十四日葬儀が営まれた。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

予告

日蓮大聖人劇特別公演琵琶史劇 六月一日(休)十時四十分東京日本橋三越劇場、主催青柳吉之助劇団(千五百円)。佐藤旭天紅女史等数氏参画の琵琶劇六題の外鈴木流泉、押川旭葉、田中旭謙三氏の琵琶独演、その他詩舞舞踊など合計四十三番。

紅(くれない)会の演奏会 六月二日(休)十二時半東京日本橋三越劇場。筑前琵琶女流の会で仲川旭朋、押田旭野、吾妻江風などの諸名手や舞踊等十九題。

各流派合同琵琶演奏大会 六月五日(日)正午京都市烏丸通夷川上る京都商工会議所三階大ホール、主催京都琵琶協会。男女会員十数人の外筑前山崎旭萃(大阪)、錦心流阿部勝水(名古屋)の両女流名手協賛出演。

松岡旭岡琵琶七十周年記念演奏会 六月五日(日)神戶市長田町能楽堂、主催旭岡会。筑前琵琶旭会東西の名手多数出演。

京都琵琶協会六月定例茶話会 六月十二日(日)神戸市平野区五ノ宮町平野会館。午前十一時国鉄三ノ宮駅前そごう百貨店前の市バス乗場集合、平野会館で定例茶話会のあと安住旭

康女史の斡旋で神戸附近の初夏の海浜風光を遊覧船で周遊。(平野会館へはそごう前から市バス⑦又は②で五ノ宮下車)。ものがたり琵琶雅俊杉山旗水演奏会 六月十三日(月)夕五時半東京上野本牧亭、主催旗水後援会(千円)。「物語琵琶雅俊会」発足第一回の演奏会で浅野晴風、山口速水、若宮旭登都錦穂外数氏が賛助出演される。

庭に咲く濃艶な牡丹、ばらの花をうっとり眺めながら聞くともなしに部屋に隅にあるテレビから流れるニュースを耳にする。二百海里問題で魚類値段の昂騰、銀行郵便預貯金利子の引下げ、タクシイの値上げ等々、我々庶民には頭の痛い話が次ぎ次ぎに登場して来る。世の中は一体どうなっているのか。本号掲載「西南戦争百年と現代」の執筆者毛利敏彦氏は大阪府立大学教授で日本政治史の権威である。これは先生が過日朝日新聞に載せられたのをそのまま拝借したものであるが琵琶の演奏会には必ずと云ってもよいほどよく歌われる。西郷隆盛関係の内容で粗見を許さぬものである。心して読んで欲しい。季候のよいものこそ暫くでやがてまたうっとろしい梅雨期に入っている、明治大正生まれの多くの琵琶人各位、どうぞ充分健康に留意して琵琶を楽しまれたい。

昭和五十二年六月一日発行(非売品) 編集者 植村寛水 発行所 京 紘 社 高槻市津之江北町一ノ二二三 電話〇七二六(七三三六〇五)番

琵琶 機関紙

京 紘

第二七六号 京 紘 社

薩摩琵琶とその周辺 (十六)



栄光三笠に日本人の凌虐 盗人猛々しきソ連 一夜にして酒池肉林の艦内 敗戦独乙国民の気概 一ホーファー博士の予言

東京 坂本 錦道

世界海戦史上不朽の名をのこした三笠は、大正十年のワシントン軍縮会議の結果廃棄処分と決定した。そしてその実施は大正十三年と日限も決まった。三笠と東郷の過去における栄光を知る国民は、涙を流して「何とかしてこれを永久に保存する方法はないものか」と智慧を出しあった。与論は遂に高潮に達して三笠保存会が生れ、之を支持する人々の努力によって、英米仏伊の諸政府からも「保存して差支えない」との同意を取り付け、淨財を広く集めて三笠保存の作業は横須賀鎮守府の手に委嘱して、下甲板を白浜海岸に据付け、艦側底部をコンクリートで固め、大正十五年十一月その工を終ったのである。

さて、茲までは三笠も無事であったが、大東亜戦が終結して連合軍極東委員会が日本に對し、如何に三笠と雖も軍艦の形体を許さないことを決議した。そしてこの三笠の保存に對して最も強く反対したのは、ソ連代表のテ

レビヤンコ中將である。彼は三笠を指して「日本がソ連を負かした不屈至極の記念であるから、即刻破壊廃棄すべし」と猛然と力説し、米英委員との間に論争を起した。米英側は、このような過去の国民的記念艦は認めても何等の害はないと発言応酬したが、結局妥協案が出来た砲塔、煙突、艦橋、マストを撤去して存在を許すことになった。つまり魂を抜いて形骸だけを認めたいというものだ。

それから間もなく、この栄光の三笠の保存を托されていた横須賀市は、昭和二十三年一觀光事業会社に払い下げてしまったのである。三笠は一夜にしてダンスホール、映画館と化してしまった。夏の夜は甲板に艶笑のアベックが袂に浜風を納れて横たわり、ダンスホールでは酒に酔いしれた男女が入り乱れて乱舞する風景、あゝ亡国の悲歌、それは魂を抜かれた形骸であって軍艦ではないのだ。三笠の栄光と悲惨なるその末路ノ 曾ってこの甲板

に皇国の興廃を背に戦った勇士の血が流されたことを思えば、実にその惨状見るに忍びないものがあるであろう。

撤去された重要部分品は米英委員の好意によって、やがて時世が変わって復元の時もあるんかとの考えから、部品毎に嚴重に梱包して大切に艦側に保存されていたのである。三笠に對する冒瀆はそれからまだまだ深まるのだ。

昭和二十五年朝鮮動乱の勃発でクズ鉄が暴騰した、三笠に使われた優秀な重要鋼材はみな安価に払下げられてしまった。それは日本人が処分したのだから、当時の米英委員の好意も全く何の役にも立たず、さぞ残念がっていたことであろう。これは何たることであるか、東郷さんや血を流した護国の勇士は泉下で泣いているだろう、いや心ある日本人も皆泣いたであろう。

その罪は当時敗戦下国民総虚脱の真最中で横須賀市や国を責めたとして何の役にも立たない。やがて二十七年に至ってその三笠の保存や管理が大蔵省にやつと戻った。

この頃である、米英人が時々横須賀の海上自衛隊を訪れ、曾ってのアドミラル・トローゴの三笠を拝観せんと申込んで来たが、総監部では荒廃した三笠に案内する訳にもゆかず顔を赤らめモジモジしている、先方も恐縮して去るという事であった。何という国辱ものであろうか。先号に軍神広瀬中佐の銅像の事を述べたが、更に乃木大将の石像も、戦後十数年も浜名湖の草原に転ろがっていた、そ

の首は誰かが窃み去って、辛うじて胴体だけが見付かったという。こうしたことは戦後に台頭した自由思想の産物であろうか。もう涙どころか激怒と共に「この罰当り者め！」と思わず叫ばざるを得ない。

占領軍管理下に意々諾々たる日本人のみぢめさは、アメリカから押付けられた憲法を今日に至る迄、後生大切に温存する日本の所謂進歩的政党や学者。一方目を西に転せんか、独乙国民の占領軍の指令に対する抵抗主張を今一度ふり返って見よう、占領軍より憲法制定を命ぜられた独乙国会は「今日敗戦に伴い国民の精神的不安定なる時に、憲法を制定することは絶対に不可である、何れ国民が生活や精神の安定した時機を選んで制定せん」と一矢を酬いたという、敗けたりと雖もゲルマンの真骨頂というべきである。

最後に日露戦争当時、独乙の日本駐在武官ハウス・ホーフアーという将校があつた。日本駐在の三年間というものは一切を日本の研究に没頭して、帰国後ミュンヘンの大学教授となつてその著述「大日本」を公刊した。私はこの本を精読し私なりに分類してみた、徳川封建世襲制度の確言より幕末までを一期とし、爾後明治大正昭和の資本主義社会の出現を二期とし、戦後の経済の成長、資本主義の爛熟せる所謂エコノミックアニマルの今日の時代を三期として、ホーフアー博士の卓抜なる識見というより、その日本に与えた予言に於ては、そして博士の言は、

私の音楽ノイ (五)

水 藤 五 郎



「或る世代が種子を播きこれを培う。その後の世代がその樹陰に安住して、その樹枝の果実で鼓腹する。更に後の世代がその樹幹を切り倒して材を売って金に代える。そして最後の世代に荒廃せる不毛の土地の前に茫然と手を拱ねて立つ」云々

と述べていられる。国土やその周辺の海の自然は、開発の名のもとに遠慮会釈もなく破壊し、その荒廃と汚染、これに伴って起こる公害病は幾万人という人命を蝕び、この新しい病を治す医学も開発されず、更に汚染を増大せしめて止むところを知らない。資源も大方喰い潰して限界に達し、人間はただ茫然と手を拱ねて立つというホーフアー博士の予言は、もう人ごとではないと思う。(終)

廃業 届

相撲界では、現役力士が引退すると、その力士の条件に依つて、親方への道か、若しくは、廃業の道かが義務づけられています。

引退後、親方として所属の部屋に留まり、後進の育成にあたる人を年寄と呼んで、協会の運営を始め、部屋の経営等と、多くの仕事を与えられます。則ち、引退がそのまゝ、相撲界からの引退を意味するのではない道が残っているのです。

但し、この親方への道には、年寄株の取得、現役時に十面以上、実際には、幕内力士であることの条件を満たさなければなりません。高額な年寄株の取得が、現役時代に相当な成績を残すことの出来た人へののみ、その取得を可能にしていることはよく知られています。

これ等の条件に達し得ない人は、当然、廃業を決めて、相撲界から去ってゆくことになります。又、一度引退をした力士が、再び現役に復帰することは不可能であります。

この様にその社会に於いて、入門、出世、引退、廃業、と一連の段階が定められていて、その時期の立場が、その人の進退を明確に意味づけている相撲界を見る時、プロの厳しさを感ずると共に、常に新旧の流れがスムーズに行なわれる要因であるとも思うのであります。他のスポーツはどうかと考えると、プロ野球でも、引退をして、コーチ、監督等の職が残されていて、それに就任する諸条件の契約があつて、その人の実力次第で、どの様にも発展してゆきます。この意味では、野球は相撲よりも開かれた世界であります。

しかし、一見終身雇用と云う制度から、相撲の社会が楽な世界かと思うと、それは誤りでありませぬ。何故なら、良い弟子を育て、部屋を大きくしてゆく責任、則ち部屋の運営は全て親方そのものにかかっているからであり、球団との契約に於ける自己責任の何十倍かの

それを負わなければならぬのであります。ただ、一人の横綱でも生み出し得るならば、横綱以上の恩恵が受けられるのであります。いづれにしても、相撲に於ても野球に於ても、引退、廃業等が重要な転機となるのであります。これに対して芸界では、芸の道は厳しいと云われるのですが、引退とか、廃業とかの意味については、少し稀薄なように思えます。引退興業として華々しく行われる演奏会がありますが、この引退が、その芸能人の新しい職への節目なのか、廃業への道なのかしばしば疑問を抱くのです。ボクシングのチャンピオンが、引退後、ボクシングの強さを示しても、誰も感心は示しませんし、又、その様なことをすることもないであります。ようし、ましてや、カムバックなど出来るものでもありません。これは、相撲、野球、全てに同じことが云えるのであります。これがしばしば芸能界では行われます。もし芸が、肉体活動の一つであるならば、十年のプランクなどがあるものならば、安易な復帰などは出来ない筈なのですが、芸界ではよくこれがあります。特に流行歌の世界や、テレビ界と云われる芸界によく見られることでもあります。結婚、育児と十年のプランクをもとせせず、見事にカムバックしてくる女優や歌手、そしてタレントがあつたり、事業に進んでいた元歌手がカムバックして、レコードや映画に再デビューすることもあります。この様な事は勿論特殊に許される例であつて、多くの芸能人は、

引退、廃業の道をとるものではありませんが、スポーツ界ほど、この厳しさが高くないようでありませぬ。

これに対して、我々の伝統芸の世界では、引退、廃業等がどの様な意味を持つているのでしう。

プロとしての存立が許されるか否かは別として、ある程度のプロ、アマの意識が生じ得る社会であれば、プロとしての自覚に立つ人はこの引退、廃業、と云う行為は予想し、考慮しなければならぬのであります。

「芸は一生のもの」と云う格言は、その個人についてのみ云えるものであつて、「対社会」と云う関係では、芸はいろいろの節目を以てしているのであります。入門、出世、を半世紀以上も昔に経験した人が、無思考に無引退を決めこむことの恐ろしさは、新旧の流れをスムーズにはさせない様に思えます。

年寄株の取得に依つて、親方となつた元横綱が、新しい横綱を生み出す努力をするのですから、芸の世界でもそうあつて欲しいと思ひのであります。

一生の横綱、終身名人があまりにも多く存在した数年前の斯界が、新十両、新幕内等の新弟子を養成し得なかつた今日を迎えてしまつたことを考える時、やはり、全人の猛省が要求されるのであります。

協会に届を出して廃業をする相撲力士、我々は、何処へ引退届を提出するのでしう。



我が道を行く 六十五年(四八)

西郷 天 風

さてこの新住居を逸早くたづねて来たのは映画琵琶の後輩、石井明だった。彼は終戦後には千代田錦城と号して、かの「決戦巖流島」専門で名を知られ、遂には熱演中のステージから直接あの世へ旅立った、いわば芸能人として悔なき生涯を閉じた男だった。この日もいつもの例によつて、映画琵琶歌の台本を借りて来たのだが、この八畳と十畳二間続きの快適なたたずまいにひかれ、錦心流とも正派ともつかぬ琵琶を奏しげに語りだした。

この演奏を聞きつけた当家の主人も顔を見せやがてその語るところによれば、かの映画琵琶の先駆者若塚篁陵の高弟で早くより吟詠界に投じ、レコードにまで進出を見せた糟谷篁象君と当家とは親族だった。それとも知らず私がこの二階の住人となるなど正に奇縁と云うべきで、爾来当家との関係は別懇の間柄となり、希望に充ちた将来が約束された感が深かつた。

そこで思いついたことは、久しい間音信の絶えている絃友吉川と武部の両氏を招き、自慢の新住居を披露することだった。吉川直吉

は仲々琵琶の達人で、一時私の代りに映画館通いを頼んだ事もあった仲だが、海軍省勤務の關係で永く続ける事は許されなかった。亦彼の上役武部氏は、私を在米邦人慰問の琵琶師として渡米の道を開いてくれた先輩だが、残念にも大震災で実現不能となってしまった。此の琵琶慰問使の話は他にもあった、かの第一次世界大戦後、隣国支那の第三革命や日本シベリヤ出兵、或いはワシントン條約による日本陸軍の軍縮問題等々、祖国日本としても容易ならぬ時代だけに、民間側でも精神運動がさかんで、伝通院系の宗教団体等では、ハワイ島民の七割を占めるといわれる日系人の第二世に、日本精神涵養の手段として学校用教科書を送っており、之に協力しつつあった「やまと新聞」の長谷川社長は、毎日に発展しつつある薩摩琵琶の本領に着目、これこそ「ハワイ」の第二世向きに最適とばかり私に協力を申込んで来たが、マネージャー入選で機を逸し中止となってしまった。

このように私の琵琶生活が軌道に乗りかけた折り、かの関東大震災やら、大正天皇の崩御による国民の服喪等、芸能界不遇のなかにあって、三十五歳の私は妻帯することとなり、歌舞音曲停止が解かれた頃小石川目白台女子大学横門前で、サロン新星と云う名ばかりの小喫茶店を開業すれば読売新聞の大沢逸足氏早速やって来て提燈記事で応援するなどなかなか華々しかったが、よちよち歩きの長男が頭部に受けた傷の悪化による入院沙汰も、数

ヶ月とつゞけば人手不足の店も持ちこたえられず隣人にゆづり、護国寺裡に引込んだのが昭和二年の初めだった。

その頃東京市内は到る所に琵琶研究所が続出し、それ等の月例会が頻繁に催おされるに至り、贊助出演の傍ら私も同じ地域の住人水越芦操女史と武蔵野会を主催する等仲々多忙だった。その二、三を辿ってみれば、先づ第一に忘れぬ九月三日、神田俱樂部に催おされた阿部吟風氏歓迎琵琶大会の際、中山鳳岳先輩の代理として出演した時のことである。これは吟風氏が久々で上京されたので、門弟の斎藤鉄舟等の主催によるものだったが、さすがに、四絃界の代表的権威として知られる鳳鳴会々長木上武次郎先生の愛弟子で、東京以北の重鎮だけあって贊助出演の顔ぶれも、当時第一級の名手林鶴殿、吉村岳城、伊集院鶴城、藤井義次先生をはじめとし、小田原国尊、佐藤岳洋等の若手代表も加わり、私は中山鳳岳先輩と協力して譜付けした「小教盛」を、この名手たちの前で試演するのが目的だったが、此時ほど真剣に演奏したことはなかったと思う。

楽屋に戻った時、只一人ジョンボリと端座する盲目の老人から問いかけられた。

「今の演奏は君だったか
うーむ なかなかやるな
丁度 国で聞くのと変らんよ」

私は、その言葉に驚き、どなたなのか名前をたづねようと座についた時一人の絃友が、

「オイ、天風君、チョットチョット……その声に何かと座敷の外に出れば、早くも玄關先に付むは、絃聖なぞと琵琶新聞に隠れなき、林 鶴殿師であった。」

「君の演奏を聞いたのは初めてだ」と、いささか興奮気味で、まだ会は終らぬのに附近のバーで下口(げこ)の私を口説きながら、時の移るのも知らぬげに、チビリチビリと呑みまはれいかにも楽しげに見え、呑めぬ私もいつしか度を過してしまった。

やがてバーのおかみに、「時間ですから」と追い出され、内心ホッとした私を離さず、坂道を万世橋方面に降りて、広瀬中佐の銅像周辺に並ぶ屋台店ののれんを排し、頭だけ突込んで呑み足らぬ分を埋合せぬかの如く茶碗を傾けつゝ、もう私にはかまわなかった。

史談 元禄時代の人々

旭城



琵琶歌は国の興廃によって、その時の社会の風潮を反映する特性をもっている。

世界に比類なかつた日本も、敗戦後は飢えとの戦いなどで一般に不良化し、街ゆく人々の姿は沈み勝ちとなり琵琶は遠ざかっていった。その時、突然流行したのがバチンコと、

歌謡曲であった。そして現在では男やら女やら見分けのつかない歌手と称する若者が、明治大正時代の人間には判らないような歌曲を、いとも華やかに歌うという世に進んで行く。人は人、自分は自分だ、青春時代に習い覚えた琵琶、貴重な体験から得た歌詞の中から、「赤穂義士」ものは今も尚我が人生の糧となっている。

秀吉の没後政治の実権は、時代の風雲児徳川家康の手に移った。慶長八年(一六〇三)家康は征夷大将軍となって江戸幕府を開き、徳川幕府がスタートして元禄元年(一六八八)には徳川綱吉が五代將軍となった。

綱吉が將軍になると、小納戸役の柳沢吉保を抜擢してお側用人を命じた。小納戸役の先輩南部直政は、奸智にたけた吉保に恐れを感じ憂慮しているうちに、元禄七年春、吉保が幕府最高の大老職になるに及んで、幕府の実権は完全に吉保が握るようになり、綱吉の実力は薄らいでゆく。

名君とは云えない綱吉の生い立ちについて見るに、彼は三代將軍家光の第四子で母親はお玉といふ、京都堀川の小さな八百屋の娘で父の死後母はお玉を連れて摂家侍本荘常正の後妻となって生長した。当時公家の参議六條有純の女で、伊勢山田の皇大神宮に關係のある尼寺、慶光院の住持となつたお方という女性がいながら、寛永十六年慶光院の礼に江戸表へ下つたとき、その美貌が家光の目にとまり、還俗して側室となった。

幕府は京の六條家と二條家とは縁が深く、家光が慶光院のお方と共に伺候したときに、お玉も大奥に仕えている内に家光の寵を受けて綱吉を生んだが、正妻には子がなかった。家光には綱重、綱吉の二子があり、長するに及んで綱重は左馬頭となって甲府城主に、綱吉は右馬頭として上州館林城主となって、共に禄高二十五万石を与えられ、参議の役職に就いた。綱吉は初め江戸城三の丸に住んでいたが、歴史に残る明歴の大火災で館は焼失、神田に屋敷を持ち主命に背いて館林城には殆ど行かなかつたと文献に記されている。

將軍となった綱吉には妻が多く、正室は家柄の京都関白鷹司家の姫で、茶華道をはじめ諸芸一般に通じていたが、実子がなかった。側室お伝の方は初め女兒を生み、次いで男児を生んだ。綱吉の母は家光の死後仏道に入つて桂昌院と云つた。

綱吉には男児が生まれても早死したので、僧隆光などの奨めにより生類を憐れめば男児を得るものとの念願をもって、各所に立派な小屋を造つて捨て犬を飼育させ、犬に危害を加えた者には刑罰を科すという布令を出し、世間では綱吉を犬公方といひ、町人たちはその布令の取扱いをめぐつて悪評が多かつた。これらも柳沢吉保の政策に任せられたもので、彼の術策に陥入つたといわれる。

綱吉はまた男色をも好んだと云われ、一種の精神病者とも思えるふしがある。綱吉は学問好きであつたように記されているが、これ

は只書物を読むだけの楽しみで、武芸、社界、経済、教育などを含む大学識を生かして、政治に取入れる器量人ではなかつたらしい。

泰平の元禄時代も末期に近づくと、寝むりを醒ませた。それは「忠臣蔵」で知られる赤穂浪士四十七人の、故主浅野内匠頭仇討ちの壮挙である。

筆者は昨年伊勢の松阪へ行った。こゝは南伊勢の中心地で商業都市として古くから盛え、全国からの伊勢参宮街道、熊野街道などの宿場町として発展した町である。かつては一農村に過ぎなかつたが、天正十六年(一五八八)豊臣秀吉の命により蒲生氏郷が領主となって築城し、近江の国の日野から商人を招いて商業活動に意を注いだ。

天下泰平の元禄時代には、万事派手好み思想が拡がり、住居調度から衣裳、刀剣類に至るまで一型式(元禄模様)を画し、武士も町人も総てが身分を越えた派手好みであつたこの時突如夢を破つたのが赤穂義士討入り事件である。

大石良雄が山科に閑居したのは、良雄の実弟専貞が男山八幡宮の大西坊に居り、その亡きあとに甥の証讃坊が住職にすわり、山科の里には縁者の郷士進藤五郎右衛門が居り、また同志の赤穂浪志達も赤穂、京都、伏見、大阪、江戸の六か所に住んでいて、東西の何処から来ても山科は中心地で、互いの連絡を取るに便利であつたからであるといふ。

西南戦争百年と現代(一)

一 征韓論政変の真相と西郷

毛利 敏彦

今年、西南戦争百年であり、西郷隆盛没後百年である。明治政府誕生の最大の功労者であった西郷が、明治政府と対立関係にはいつたきっかけは、いうまでもなく一八七三年(明治六年)十月の政府の大分裂、いわゆる「征韓論政変」である。したがって、その帰結である西南戦争の歴史の意味を理解するためには、まず征韓論政変の原因と真相を解明しなければならない。

明治六年十月十五日、閣議は、西郷参議の希望にもとづいて、かれの朝鮮国派遣使節任命を決めた。ところが、西郷派遣に反対する右大臣岩倉具視や参議大久保利通らは、ひそかに陰謀をめぐらして閣議決定をひっくりかえしてしまった。そこで、西郷以下、板垣退助、副島種臣、江藤新平、後藤象二郎の各参議は、こぞって抗議辞職し、政府は真つ二つに分裂したのである。

従来、この政変は、征韓論の西郷と非征韓論の大久保との対立から発したとされてきた。すなわち、日本の国権拡大・大陸進出をめざした西郷は、その第一歩として朝鮮征服(征韓)を期し、みずから使節となって朝鮮で殺され開戦のきっかけをつかもうとしたのに対して、大久保は欧米諸国巡遊の体験から国内整備の急務を痛感し、内治優先の立場からあえて竹馬の友西郷の朝鮮派遣に反対し政変となつた、というのである。いわゆる外征派と内治派の対立という見方であり、中学校や高校の教科書にもだいたいのこのように記されている。

はたして、そのような常識化した見方は歴史の真実をつたえているのだろうか。近年、わたしは、この政変を研究してみても、外征派対内治派という通説が、あまりに事実と食い違っているのを発見し、びっくりした次第である。

そもそも、この時期に西郷が本気で対朝鮮開戦を期していたとすること、つまり西郷を征韓即行論者とみなすには、かなりの疑問があり有力な反証もある。現に西郷自身が、閣議への意見書で、朝鮮への派兵につよく反対し平和的交渉の必要を力説している。関係史料から総合的に判断すれば、かれの真意は、みずから朝鮮におもむき、明治初年以來の兩國の懸案を話し合ひで一氣に解決し、日朝間の友好関係を樹立したいということであつたと見て間違ひなからう。

にもかかわらず、西郷は征韓論者説が根づよく語りつづけられたのはなぜであろうか。その有力な論拠のひとつに、西郷を士族の大親分とみなす議論がある。すなわち、没落してゆく士族に深い情愛をかたむけその行く末を案じていた西郷は、征韓論によって、士族の不滿を放散するとともに、士族に戦功をたてさせてかれらの存在意義を再評価させ、士族の地位回復をめざした。というのである。さらに、その考えをすすめて、西郷は、征韓をきっかけに士族の軍事独裁体制(武政)を樹立しようとしたのだ、という主張もある(井上清氏など)。したがって、士族の大親分たる西郷にとって、征韓は必要不可欠であつたというわけである。

ところが、よく調べてみると、史実は逆のことであることを示している。

士族没落のきっかけは、いうまでもなく明治四年の廃藩置県とそれともなう封建領土制の解消であつた。士族は数百年の君臣関係から切りはなされ、その存在の場を失つた。もし、西郷が士族の大親分であれば、廃藩置県に賛成することはありえなかつたであろう。ところが、実際には、廃藩は、筆頭参議西郷の決断と指導性のもとで遂行され、かつ西郷が設置を発意し指揮した御親兵の威力を背景に実現したのは周知のことである。廃藩を布告したあと、今後の対策と展望をめぐって政府内で小田原評定がかさねられていたとき、遅れて出席した西郷が「此ノ上若シ各藩ニテ異議等起リ候ハバ、兵ヲ以テ撃チ潰シマスノ外アリマセン」と叱咤すると、「此ノ一言ニテ忽チ議論止ム」といふのは有名な話である(佐々木高行日記)。

日本芸術琵琶会例会

四月十七日(日)昼東京西新宿柏ビル六階。お江戸日本橋・門琵琶演奏・山崎錦幽・掛合茨木・杉山旗水・高田瑩水・俊寛(上)坂入俊風・坂崎出羽守・青木草水・滝口入道・錦幽・川中島・橋本草水・秋風故郷の山・長谷川錦舟・堅田落・若宮旭登・平家都落ち朗読・雨宮映月・俊寛(下)瑩水。以上研修、小宴の後七時散会した。

大阪琵琶同好会の演奏会

四月二十三日(土)昼京都伏見醍醐寺会館。その昔太閤秀吉が豪華な花見の宴を開いた醍醐寺に於て当時を偲びながらの演奏会にて、菊水の旗・米原旭智・白ゆりの塔・島津旭星・城山・矢野旭信・加茂川の露・島田旭蒼・島田旭紅・青葉の笛・作花旭秋・神崎与五郎・光旭仙・伽羅の兜・辻旭城・安宅・石橋旭嶺・壇の浦秘曲・木内悠起子・若き敦盛・天津八千代。外に詩吟、日舞、剣舞、奇術等十余題。快晴に恵まれ多数の花見客が古典楽曲に耳を傾けていた。

第二十一回神武館道場発表会

四月二十四日(日)朝十時神戸湊川神社横神戸文化会館ホール。兵庫県、神戸市の後援で独吟、連吟、本衣裳かつらをつけた吟舞等七十四題が披露されその内剣詩舞「本能寺の変」は二十八人の構成で三浦蓮水女史が琵琶演奏また「錦秋青葉城」(松野紫雲作)は三浦女史の琵琶で女性十一人が政岡、千松などに紛して華やかな場面を繰り上げて千数百人の視聴客を魅了、盛会を極めた。

三位研修同志会四月例会

四月二十四日(日)昼三鷹市上連雀公会堂。

(録音)小野訓導・伊集院一城・伴流秘曲連弾・錦幽、錦道・木村重成・中村晃憲・滝口入道・山崎錦幽・敦盛(上)八束一峰・滝口入道・田戸桜丸・城山・柏木篤道・彰義隊・清水源城・滝口恋慕篇・坂本錦道・尋陽江上・西村嘉峻・赤星崩れ・伊集院鼓城。以上研修を終り小宴の後散会した。尚次回は五月八日(日)同所に於て開催の予定。

第二九九回名韻会

四月二十七日(土)正午東京渋谷東横劇場。邦楽各種(長唄、琵琶、小唄、新内、義大夫、宮園節、清元、常盤津、小唄振等十五題)各一流の名演奏が披露され琵琶は京都の平井春嶺氏が「本能寺」の一曲を演奏して超満員の視聴客陶酔せしめた。

赤心流春の大会

四月二十九日(日)朝十時静岡岡市城内婦人会館。毎年の行事で今年は十五回目。赤心流鶴翁氏の主宰で春は詩吟詩舞の会、秋は琵琶の演奏会が催されている。当日は知事、市長等の祝詞があり会員の外有名人多数が協賛出演して盛況を呈した。尚赤心流では四月三日静岡浅間神社拜殿で琵琶、詩吟を、四月七日伊勢神宮内宮饗膳所にて詩吟を、また四月十七日久能山東照宮本殿に於て詩吟、琵琶をそれぞれ奉納演奏された。

京都琵琶協会五月定例茶話会

五月一日(日)昼会員梅原旭瀧女史宅。馬場鴨水、林田旭城、田中鵬水、梅原、矢吹旭美津、安住旭康、山岡旭清、牧南水、古谷竟水、荒木旭媛、木村維水、庵師旭富、水内媛水、平井春嶺、植村真水の各会員が出席し左記数氏が演奏のあと梅原女史心尽しの当地名物肴料理

などで小宴を張りつゝ芸談雑談に楽しい半日を送り八時散会した。

彰義隊・木村・小督・山岡・本能寺・牧・川中島・馬場・竜の口・田中、矢吹・井伊大老・植村・西郷隆盛・林田。

琵琶名流演奏会

五月六日(金)昼東京日本橋東京証券ホール。主催日本琵琶楽協会(千五百円)。西郷隆盛・荒川洲博・扇の的・高久穂芳・明がらすお吉・石井桑水・小敦盛・栗原雨竹・豊太閤・北村旭奎・吉野落・上梨洲映・水天門・平井春嶺・曲垣平九郎・木原綾子・戻り橋・小原旭成・川中島・橋本草水・小松の操・遠藤鶴東・粟津ヶ原・押川旭葉・彰義隊・古家絃風・壇の浦・広瀬翠紅・常盤御前・甲田勳水・井伊大老・都錦穂・伽羅の兜・富樫旭桂・舟弁慶・小沢錦弥・本能寺・水藤五郎・小栗栖・横野旭鳳・会津の華・杉山旗水・その日の東郷大将・大塚岳峻・静幻想曲・斎藤桜玲・対王丸・藤巻旭鴻。

比叡山延暦寺法要に琵琶奉納

五月六日(金)天台宗祖伝教大師(最澄)の出家千二百年慶讃大法会が総本山延暦寺で行われ宮崎の女清法流筑前琵琶と福岡の常楽院法流薩摩琵琶の珍しい法要が根本中堂で営まれた。筑前琵琶は大師が中国に渡つたとき大師の弟子となつた僧玄清が伝えたもので、自分の功德を積むと同時に他に利するといふ天台の教えの流れをくんで京都粟田口の青蓮院に入り目の自由な僧たちの間に広がった。その後平家琵琶として知られ常楽院法流の誕生となった。当日は宮崎、福岡にその流れを伝えるゆかりの人々が比叡山に集まり奉納した筑前琵琶は京都遷都の際御所の地鎮祭にも